

タンザニア

## 第3回党大会とニエレレ議長再選

川端正久

「ニエレレお爺さん、もういい加減にしたら」という人々の声が「ニエレレが政治の舞台から消えればタンザニアは駄目になる」という人の声に掻き消され、「ニエレレはタンザニアではまだ最も有力な政治家である」という当り前の結論を出してしまった——これが1987年10月のCCM(革命党)第3回大会における党議長選出劇のあまりにも不興な落のない芝居の引幕であった。ニエレレ主演、カワワ演出の舞台も62年(ニエレレ大統領、カワワ第2大統領)から延々25年のロングランだから観客の白けぶりも容易に想像できる。

### 1 第3回革命党大会とニエレレ議長再選

タンザニアの唯一の合法政党は1977年2月に結成されたCCM(チャマ・チャ・マピンドウジ=革命党)である。82年に第2回大会を開催したので、今回は第3回大会であった。第2回大会ではニエレレ議長とジュンベ副議長が選出され、カワワ書記長が就任した。84年1月、ジュンベ副議長兼ザンジバル大統領が解任され、その後、ムウィニが副議長兼ザンジバル大統領に選出された。85年のタンザニア大統領選挙ではニエレレが大統領を引退し、ムウィニがタンザニア連合共和国大統領に就任した。それ以降、ニエレレはCCM議長を引退する、議長と大統領は同一人物が望ましい、と何度も発言してきた。にもかかわらず、第3回大会でニエレレ議長が再々選されてしまった。人々はこのニュースを聞いて自分の耳を、そしてラジオを疑った。

第3回党大会開催とニエレレ議長選出の経緯は

政府紙『デイリー・ニュース』(以下、DN紙)によれば以下のとおりであった。CCMの組織機構は全国一州一県一支部一細胞のヒエラルキーから成っている。選挙は細胞から開始される。1987年2月、細胞レベルの選挙が開始された。87年8月、県議長選挙が実施された。8月23～24日、CCMのCC(中央委員会)会議が開催された。9月3～8日に開催されたNEC(全国執行委員会)会議は州議長選挙候補者を指名し、党大会の主要報告(党活動、党プログラム、経済プログラム)を審議した。9月末に州議長選挙が実施された。主要報告文書が印刷され、大会参加予定者に配布された。DN紙には「大会アジェンダ欄」が設けられ、「生産性について討議すべきである」(9月10日)などの一連の「主張」が掲載された。9月26日のCC会議は党規約改正問題を討議した。大会準備作業を統轄したのはカワワ書記長であった。

大会は10月22日に開始されると発表された。10月20日にCC会議、10月21日にNEC会議が開かれた。NECは議長候補者にニエレレ、副議長候補者にムウィニを推薦した。10月22日、新首都建設が進められるドドマにおいて、1931人の代表が出席して全国大会が開催された。カワワ書記長が大会代表を紹介した。ニエレレ議長が開会演説を行なった。その内容は、(1)平和と安全、(2)正義の社会、(3)社会主義建設への貢献、(4)党の任務(社会主義と自助、柔軟性、党内民主主義)、(5)結論、から構成された。大会に提出された主要報告と提起者は、(1)NEC活動報告=カワワ書記長、(2)党プログラム1987～2002年=ヌゴンバレ・ムウィル中央委員、(3)経済プログラム1987～92年=ハマード中央委員、

(4)党規約改正＝ナウエ中央委員であった。

10月26日、党規約改正案が採択され「CCM規約、1987年10月版」が成立した。10月27日、NEC選挙が実施された。10月30日、議長・副議長選挙投票が行なわれ、その際ムウィニがニエレレ議長への投票を呼びかけ、カワワがムウィニ副議長への投票を呼びかけた。10月31日、投票結果が発表され、大会は閉幕した。11月1日、NEC会議はカワワを書記長に再選した。指導者選出投票の結果はニエレレ議長支持1878票(投票総数1910)、ムウィニ副議長支持1907票(投票総数1908)、カワワ書記長支持158票(投票総数159)であった。11月2日、NECはCCを選出した。ハマードとムスヤがCCに再選されなかった。写真によれば序列はニエレレ、ムウィニ、カワワ、ワリオバ、ワキル、サリム、モンゲラの順であった。11月3日、カワワ書記長は25人の州書記を任命した。

大会の焦点は議長選挙に向けられていた。1987年初めから、ニエレレが議長に再び立つか立たないのか、小田原評定は長く続いた。大統領が議長を兼任するパワー・コンビネーション論と、大統領と議長を別人が分担するパワー・セパレーション論が闘わされた。ニエレレ自身は87年7月までパワー・コンビネーション論を主張し、何度も議長引退を示唆した。だが、ニエレレが引退という意思を覆すかも知れないという「噂」が87年初めから流されていた。これに対してニエレレは大統領と議長が別人であるのはよくないと語り、この発言は党紙の『ウフル』に掲載された。またカトリック系雑誌『キオンゴジ』はニエレレの勇退を呼びかけた。こうしてニエレレ議長引退は一般には確実視されていた。

他方、ニエレレ支持派はニエレレ議長再選運動を大衆運動ではなく、党内深部で進行させた。大統領ばかりか議長までがザンジバル人に握られる

のはよくない、という「見解」が流された。ニエレレ支持運動の進展の頃合を見はからって、ニエレレは慎重に進路を変えた。転換日は8月5日であった。ニエレレはある党員の質問に応じて、議長に再選されるか引退するかは10月の党大会が決定することであると発言した(DN紙、8月6日)。つまり、大統領が議長を兼任するというのはいいことだが、これは別に憲法(規約)に決められているわけではない、と述べたのである。これは議長再選へのニエレレ流の布石であった。

9月7日、ニエレレはレーニン平和賞を受賞した。おりしも開催中のNEC会議はニエレレを称える特別決議を採択した。9月10日、ニエレレは兼任問題を実際の立場から「柔軟に」考える必要があると発言し、これがDN紙(9月11日)の一面トップ記事となった。結論が出された。ムウィニは10月初めから10月19日に帰国するまで3週間、ニューヨークなどを外遊した。つまり大会準備作業に加わらなかった。カワワがニエレレの意を体して大会準備作業を推進した。

しかし一般には、ニエレレ議長再選の台本は漏らされなかった。議長候補者にニエレレを推薦することを決定したのは10月21日のNEC会議であったが、その日のDN紙は兼任問題は大会が決定する事項であると空々しく書いていた。したがって大会が開催されるまで、国外ではニエレレ議長が引退するものと思われていた。だが実際にはニエレレ議長が再選された。近隣諸国の反響は冷やかであった。ケニアの新聞『スタンダード』(11月1日)はニエレレ再選を報じたが、両国関係を反映してか実に素気ない記事であった。比較的友好関係にあるジンバブエの新聞『サンデー・メール』(11月1日)は「ニエレレ——負担を共有」の見出しで、ニエレレ議長再選がムウィニの仕事軽減にあるとのニエレレの主張を受け売りした。『ザ・タイムズ』

(10月31日)はニエレレ復活を短かく報じた。だが記事にしなかった新聞、雑誌が多かった。

## 2 二頭政治からポスト・ニエレレへ

ニエレレ議長再々選という結果は党内分裂回避の妥協の産物であった。党内勢力は地域的にはタンザニア本土派、ザンジバル派、ペンバ派の3派に、政治的にはアルーシャ宣言以来の社会主義を堅持する「オールド・ガード派」とIMF導入による経済改革を進める「テクノクラート派」に分かれていると言う(『ニュー・アフリカン』1987年10月)。前者には社会主義者ヌゴンバレ・ムウィルやカワワがおり、ニエレレ議長を支持した。後者にはムスヤ蔵相やザンジバルのハマード首相がおり、ムウィニ副議長(大統領)を押し立てた。

ニエレレは一方では、大統領と議長は同一人物が望ましい、したがって自分は議長を下りると言いつつ、他方では、議長を選出するのは党大会であり、「党員の多数が私にやらせるというのなら、それに私は反対しない」と述べた。要するに、議長選挙はニエレレ個人の意思の如何にかかっていた。ただ「私は辞める」と自分からは切り出せなかった。そこでニエレレ自身がムウィニに対して、当面の改革についてはムウィニのやり方を大筋において支持する、だからムウィニがニエレレ議長再選を推薦するように助言した、と言われる(『アフリカ・ゴンフィデンシャル』1987年11月4日)。ニエレレ再選の背景には次のような諸問題があった。

(1) タンザニア社会主義。ニエレレ議長が辞めればニエレレが領導してきた社会主義(ウジャマー)の哲学と運動はどうなるのか。この点、他のアフリカ諸国のこれまでの経験は明白である。ニエレレが辞めればCCMはどうなるのか、タンザニアの安定と前途はどうなるのか(と公然と漏らす高官が

いる)が焦眉の問題となる。ニエレレが辞めてもCCMが生き残り、タンザニアが安定を維持できる体制を確立しなければならない。そのために党大会は社会主義と自助というアルーシャ宣言の旗を再度高く掲げた。ヌゴンバレ・ムウィルの提案した「党プログラム1987~2002年」は社会主義建設15カ年計画である。大会最中にDN紙特集号(10月27日)が発行され、また党プログラムを解説した緑色のブックレット(88ページ)が出版された。大会後、ニエレレ思想を普及するイデオロギー建設運動が全国的に展開されている。

(2) 経済改革。ムウィニ大統領はタンザニア経済をどん底から回復させつつある。そこでニエレレが今辞めれば、ニエレレは自己の経済運営の誤りを認めることとなる、それはできない、とニエレレ支持派は考えた。経済改革を推進する「テクノクラート派」は1986年にIMFの資金を導入した。ニエレレ支持派を含む保守派はIMF導入そのものに最終的に反対できず、IMFの条件を批判した。87年2月のNEC会議ではIMF問題が討議され、経済改革のいきすぎや条件が批判された。出席予定のなかったムスヤ蔵相がダルエスサラームから呼びつけられた。ニエレレはIMFを拒否したザンビアを評価し、暗に改革派を批判した。ザンジバルの外貨利用問題ではニエレレとハマードが対立した。経済改革をめぐる党内対立は深刻である。改革推進派がムスヤやハマードそしてムウィニ、改革批判派がマリマ、ヌゴンバレ・ムウィルそしてカワワである。党大会でドドマ代表は経済改革について質問したが返答がなかった。つまりこの問題を議論すれば改革をめぐる党内対立が露呈するので、大会はこれを回避したのである。アルーシャ宣言かIMFかについては大会はアルーシャ宣言の旗を掲げ、経済改革にブレーキをかけた。改革派の旗振役、ムスヤとハマードはCCから外さ

れた。これは経済改革政策の後退と受け取られている(『スタンダード』11月4日)。12月12日の内閣改造では、いわゆる「改革反対派」のヌゴンバレ・ムウィルとムワカワゴが党務に専念するためという理由で閣僚から外された。経済改革問題をめぐる政府と党の関係は微妙である。

(3) 連合問題。タンザニア連合共和国にとってのアキレス腱は「連合」問題である。ザンジバルでは依然として連合反対派の動きが続いている。1987年7月、連合に反対し経済改革を攻撃するザンジバルのオールド・ガード (IDASP) の手になると見られる「煽動的」文書(23ページ)がばらまかれた。ワキル大統領は分離派の策動を何度も批判した。ニエレレ支持派はタンザニア本土、ザンジバル、ペンバの三者均衡を維持しながら、連合共和国を維持し、やがてはザンジバルをタンザニアの一州にする道を模索しているといわれる。

(4) 内憂外患。タンザニアは内外に難問を抱えている。国内問題では腐敗・汚職・賄賂・公金横領が氾濫している。ニエレレ前大統領時代、不正事件の処理は蜥蜴の尻尾切りで終わっていた。それでは埒があかないとムウィニ大統領は監督の立場にあるトップの責任を追求する姿勢を打ち出した。ムウィニのいわゆる「鉄帚」である。国外関係では東アフリカ諸国の国境が緊張している。1986年末、タンザニア軍は、民族抵抗運動のゲリラ活動を封じるためにモザンビーク政府の要請を受けて、ジンバブエ軍とともにモザンビークに進駐した。他方、87年初めにケニア政府は国内不安定の要因になっているという理由で1600人のタンザニア人を国外に追放した。さらにウガンダとケニアの軍事衝突事件が勃発している。

(5) ニエレレ支持派。1985年にニエレレが大統領を辞任した際も、ニエレレ支持派は最後までこれに反対した。ニエレレ議長とムウィニ大統領の二頭体制のもとで種々の軋轢が生じた。たとえば87年3月、ムウィニはIMFの条件に応じてメイズ価格を引き上げたが、ニエレレはこれに反対し、逆に下げさせた。ニエレレ支持派(その中核はマラ地区周辺出身のクリア人グループ)はムウィニが議長になることに強く抵抗した。軍指導部はニエレレ支持派で固められている、といわれる。

ニエレレ支持派が描く政治的シナリオはこうである。1985年の大統領選挙でムウィニを支持したが、これは一期だけの中継ぎとして認めたにすぎない。次の大統領はワリオバである。だからワリオバを首相に据えた。90年の大統領選挙の際、今度こそ本当にニエレレは辞めるといふ、しかし同時にムウィニにも大統領辞退を助言する、二人がともに辞めてワリオバを議長兼大統領に指名する、そうすれば念願のパワー・コンビネーションが達成でき、ニエレレ後もニエレレ支持派の政治支配が維持され、タンザニアは安定する、という筋書である。はたしてそのシナリオどおりに進むだろうか。

1982年の第2回大会に参加したゲイタ代表は「党議長の報告も議論も全く立派なものである。ただし言葉どおり履行されればのことである。タンザニアはいつも立派なプランを立てる。だが実行できない」(DN紙、1982年10月25日)と述べた。今回も全く同様である。立派な報告が提案・討議・採択された。要は実行の如何である。第3回大会は三度目の正直になれるかどうか。

(かわばた・まさひさ/龍谷大学教授)